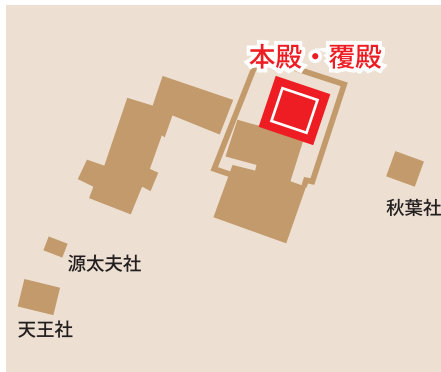
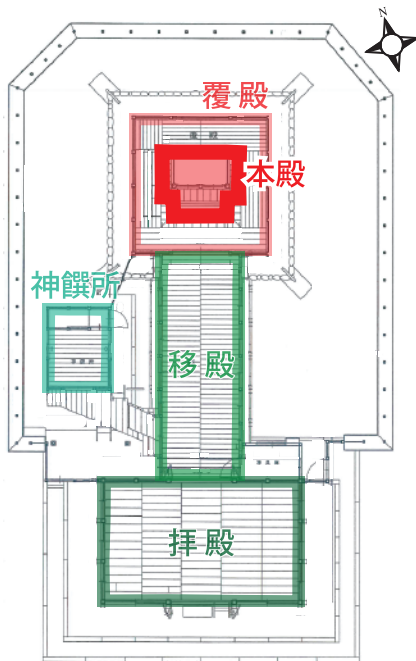




東端八劔神社の創立は、平安時代末期の安元元年（1175）または治承4年（1180）とされます。江戸時代中期の元禄14年（1701）に二社併立の社殿を新築し、向かって右側に八劔社、左側に若宮八幡を祀ったと伝えられています。

本殿は、二間社流造、柿葺きの建物です。流造の建物は一間または三間が一般的で、正面が二間となる神社本殿は、全国的にも類例が少ない貴重なものです。彫刻などの装飾を最小限に抑え妻飾りを叉首組とする建築様式や、享保6年（1721）と寛保4年（1744）に屋根を葺き替えたことを記した棟札から、本殿の建立は江戸時代中期（18世紀初期）と推定されます。



本殿を風雨から守る覆殿は、鬼瓦に寛政10年（1798）の簀書があることや、虹梁や墓股などの様式から、江戸時代後期（18世紀後期）の建立とみられます。一般的な覆殿は、本殿の四周に柱を立て、その上に屋根を被せただけの簡素な建物が多いですが、八劔神社の覆殿は、妻飾りに二重虹梁・墓股・大瓶束を用いて装飾的にし、規模も大きく立派に造られています。覆殿としては本格的な社寺建築の様式を有しています。

またその作風から、当地域で多くの社寺建築を手がけた牛久保（豊川市）の堂宮大工、岡田五左衛門との関係がうかがえます。

